PROJECT

アイヌ民族の展示改革への挑戦

文・写真
スチュアート ヘンリ

共同研究 ● 博物館におけるアイヌ民族とその文化の展示のあり方の再検討（2007-2010）

研究の背景

博物館においてアイヌ民族はどのように表象されているのかを再検討するというこのプロジェクト課題にとりくむ契機は、1990年から手がけた中・高の社会科教科書の調査にさかのぼる。その調査で、社会科教科書にはアイヌ民族に関する記述がきわめて少なく、記述がある場合でも近世の様子が中心であり、挿絵などの視覚資料も近世・近代のいわゆる「アイヌ絵」に限られていることが判明した。

社会科教科書の情報では、アイヌ民族は過去の存在である、もしくは100年以上前の生活を今でもつづけているという印象を植え付けるのではないかと考えられる。

そこで博物館では、アイヌ民族はどのように表象されているのかを調べた。その結果、国内30ほどの博物館の常設展示において、社会科教科書と同様にアイヌ民族の「伝統」的な様子が圧倒的に多いことが明らかになった。いくつかの博物館では著名な伝統文化継承者や文学者の写真や資料が展示されているものの、アイヌの人びとの日常的な「現代」がわかる展示はきわめて少ない。

以上をふまえて、博物館でアイヌ民族に関する展示を充実させ、その内容をより詳しくする方法を探るために、本プロジェクトを企画したのである。

アイヌ民族の展示をめぐる難問

アイヌ民族の現状が積極的に展示されない背景には、相矛盾する大きな問題があると考える。それは、いわゆる伝統的な様子を展示すると、和人との違いが浮き彫りにされ、民族の独自性が明示される一方、アイヌは現在も昔ながらの茅葺きの家に住み、採集狩猟漁撈経済を営んでいるという印象を来館者に与えてしまうことである。逆に、現状を強調すると、アイヌが直面しているさまざまな社会・経済問題が前面に示される一方で、日常生活は和人と変わらないではないかと主流（ドミナント）社会側が考えるため、民族の独自性が薄められ、先住性が否定されることによって民族権利運動の勢いが殺がれる可能性がある。この問題を克服するために、アイヌ民族の「現代」をどのように展示して来館者に的確な情報をつたえるかを議論し提言することが、このプロジェクトの目的である。

本プロジェクトでは、和人と同様に長い歴史と伝統をもつアイヌ民族、そして現代を生きるアイヌ民族の展示のあり方について、アイヌ関係者と博物館関係者、人類学者が協議することによって、展示方法を探り、大きな博物館だけではなく、予算と人員がいっそう限られている小規模な博物館や資料館でも適用可能な提言を目指している。

世界各国の博物館における民族に関する展示、とりわけ少数・先住民族に関する展示は、1960年代までは主流（ドミナント）社会の意向によって展示方法と内容が決まっていた。それまでは、少数・先住民族の展示はもっぱら「文明」を引き立てる対象として、「未開」を演じる役割を負わせられていた。しかし、1970年代に入ってから、少数・先住民族の展示は、展示の方法と内容が刷新されつつある。

カナダ、オーストラリア、北欧などの博物館では、少数民族、先住民族が経験してきた植民地的な歴史および民族の伝統的な様子を克明に提示するにとどまらず、現代はどのような生活をしているのか、直面している社会・文化的な問題にまでふみこんだ展示が多くなっている。ただし、これらの国の社会のあり方と法制度は日本と異なっている上、これらの国では少数・先住民族としての法的な保護がなされている状況であるので、展示内容をそのまま日本に適用することは必ずしも現実的ではない。外国の事例は参考にはなるが、日本社会のあり方と歴史的背景をふまえた展示が必要である。

アイヌ関係者、博物館関係者と人類学者の3者による協議を促し、3者のコミュニケーション・ネットワークの構築と情報の共有を目的に、研究を進めている。

活動

2年前から年に数回の研究会を行なうほかに、札幌で合同研究会と公開シンポジウムをそれぞれの年に1回ずつ開催した。2008年7月26日には、北海道大学アイヌ・先住民研究センターとの合同研究会で外国の博物館における少数・先住民族の展示を討論した。展示を論ずる場合、それぞれの博物館の設立趣旨と使命を加味する必要があるかどうかをめぐって討論が行なわれた。たとえば、歴史博物館であれば少数・先住民族の「現代」に関する展示はなくともよいではないかという意見があった。それについて、一般来館者はかならずしもその博物館の設立趣旨と任務を認識し

2009年12月、北大・民博（本研究会）の共催シンポジウム「アイヌ民族と博物館の共同にむけて」の会場。

帯広百年記念館でのアイヌ展示室。

て入館しないので、展示は対象の民族の現実を示していると認識するであろうとの反論が提示された。

2009年12月6日に北海道大学アイヌ・先住民研究センターとの共催公開シンポジウム「アイヌ民族と博物館の共同にむけて」において、北海道内の小規模博物館学芸員および共同研究会のメンバー以外のアイヌ側から、博物館におけるアイヌ民族の展示に対する全般的な意見、改善してほしいこと、そして今後どのような展示を期待するのかに関する発言があった。来場者からの発言を含めると、シンポジウムの要点は次のようにまとめられる。

1. アイヌ民族全体の様子に加えて地域の特性を展示すること。
2. 解説板などにアイヌ語の名称をつけること。
3. アイヌが北海道以外にも生活していることを伝える。
4. 和人の歴史(「日本史」)とアイヌ民族史を並列し、比較できる展示。
5. 受動的なアイヌ像を是正する展示。
6. 博物館が所蔵するオリジナル資料とそれを現代アイヌが「複製」した資料を並べて展示して、技術や民族アイデンティティが現代に継承されている過程を伝える展示。

解決を目指して

アイヌ民族の展示について本研究会では次の改革案が検討されている。全員の一致した意見では、「現代」だけの展示では来館者の足を遠のかせるであろう。「現代」を展示する必要性はあるが、アイヌ民族の歴史と伝統を基礎とする民族性を提示する展示は重要であるので、それに「現代」を加味することが望ましい。すなわち、従来の物質文化の展示はつづけながら、展示の方法と内容の工夫が必要である。

その1つ目は、収蔵品があって予算と人員が許せば、定期的に展示替えをすることである。同じ展示が長期にわたって変わらなければ、リピーターは期待できない。これは、地域に根ざしている中・小規模博物館には致命的な問題である。そこでたとえば、生業、精神生活、道具の製作技術のようにテーマを替えて少しずつ展示物を入れ替える。これならば企画展示・特別展示に比べて小規模な改装ですむので、より頻繁に行なえるであろう。この方法を実現するためには、アイヌ社会の地域性と多様性を示すことができるような博物館間ネットワークの構築が必要であるが、実現すればアイヌ文化に対する知識普及にも、小規模博物館の魅力を増すことにも効果があるであろう。

2つ目の工夫は、展示物を「現代」に関連づけるという方法である。一例として現代のアイヌ社会には見られなくなった物とその使い方はなぜ継承されなくなったかを解説する。たとえば、伝統的な漁撈用具であるマレㇰ(長い木柄の先に鉄の鈎(かぎ)をつけたサケを獲る道具)は現在使われていないので、それに代わる用具と漁撈の様子を展示する。一方、形や材料、あるいはその文化・社会的な位置づけが変化しても、現代に継承されている物の様子を提示する。たとえば、イナウ(儀式に際して祭壇や囲炉裏に供える削りかけ)の現代的な様子を展示する。

このような小規模の展示替えを行なえば、「伝統」と「現代」をつなげ、アイヌ民族の「現代」の一側面も伝えられるであろう。

「現代」を提示するには、3つの方法が考えられる。1つ目は、北海道ウタリ協会(2009年に北海道アイヌ協会に改称)2000年制作の「新・共生への道〜日本の先住民族・アイヌ〜」のような既成のビデオを展示場で観られるようにすることである。帯広百年記念館ではこのようなビデオをいつでも閲覧できる「リウカ」という情報室がある。2つ目は、学芸員がビデオカメラを使って地元のアイヌが行なっているイベントを記録し、そのビデオを展示場で上映する方法である。これは旭川市博物館で実施されている方法である。

3つ目は、学芸員、もしくは協力者が比較的簡単に作成できるiPod(いずれiPadになるだろう)などによって展示の説明および「現代」に関する音声・画像情報を提供する方法である。このようなデバイスが進化すると映像を展示室内に組み込む必要がなくなり、しかもオンデマンドになるため、展示の解説を変えることが可能である。しかし、デバイスを博物館が相当台数を用意する必要があることと、借りるかどうかは来館者次第なので、来館者全員が説明を受けることにはならないという問題点もある。

以上の提案をふまえて、博物館におけるアイヌ民族とその文化の展示のあり方の検討を重ねていく予定である。

すちゅあーと へんり

放送大学教授。専門は北方民族の文化人類学。著書に『はばかりながら「トイレと文化」考』(文藝春秋社 1993年)、共編著に『採集狩猟民の現在:生業文化の変容と再生』(言叢社 1996年)、『北米 世界の先住民族:ファーストピープルズの現在07』(明石書店 2005年)、「先住民の歴史と現状」(『「先住民」とは誰か』世界思想社 2009年)など。